

東洋紡株式会社 2025 年度 第 2 四半期決算説明会 質疑応答要旨

日時：2025 年 11 月 11 日（火） 11:00～12:00

場所：東洋紡(株)本社（オンライン開催）

説明者：代表取締役 社長 竹内 郁夫

副社長執行役員 環境・機能材本部長 森重 地加男

常務執行役員 フィルム本部長 工藤 政尚

執行役員 CFO 管理部門統括 斧 泰三

本資料中の将来の業績見通し等に関する記述は、現時点における情報に基づいており、
当社として保証するものではありません。実際の業績等は、さまざまな要因により異なる可能性があります。

Q：フィルムの 25 年度見通しについて、上期に比較して下期が大幅な減益になる要因は何か？

A：下期は、包装用フィルムは食品価格高騰により荷動きが悪化し、販売量減少の見通し。加えて、工業用フィルムは“コスモシャイン SRF（以下、SRF）”の生産能力増強のための既存ライン改造に伴う費用の増加を見込んでいる。

Q：包装用フィルムの収益性の改善が進んでいるが、下期以降も交易条件は現状維持できるのか？

A：製品価格の改定について、原燃料価格高騰だけでなく、物流費や人件費等の上昇分の転嫁についても交渉を進めている。今後もスプレッドを維持する方針で一定の利益を確保していく。

Q：SRF の下期の改造工事について、改造による費用の増加や減価償却費の増加については、来期以降に回収できる見通しなのか？

A：SRF の生産能力増強の工事は、既存ラインの改造であり、計画通り進められる見通し。需要も堅調であり、改造のための費用の増加や減価償却費の増加は、来年度以降、増産体制が整ってくることで、回収できる見通し。

Q：セラミックコンデンサ用離型フィルム（以下、MLCC）の現状と見通しは？

A：市場全体としては AI サーバー向けが拡大しており、25 年度は通期で約 20%の増収の見通しである。宇都宮工場の MLCC 向け新設備については、25 年春から商業生産開始し、10 月から段階的に稼働率を上げていき、フル稼働は 25 年度末頃になる見通し。

Q：ライフサイエンスは上期に対して下期に増益する見通しだが、要因は何か？

A：ライフサイエンスは下期型のビジネスであり、特に生化学診断用原料酵素の国内向けは、研究機関への納入などが年度末に集中する。また、上期は生化学診断用原料酵素の前期の生産性低下の影響が残ったが、下期に順次改善していく見込みである。メディカルは、人工腎臓用中空糸膜の一貫生産工場が下期から稼働を開始し、販売に寄与していく見通し。

Q：環境・機能材は、当初計画に対して現状どのような状況にあるのか教えて欲しい。

A：エンジニアリングプラスチックは、自動車メーカーへ直接アプローチするなどの取組みが進み、BC（Brine Concentration）膜は、リチウムメーカーとの取組みが進んでいる。環境ソリューションは、EV 市場減速の影響により、LIBS*製造工程で使用される VOC 回収装置の出荷が減少しているが、今後はエレクトロニクスの交換需要が伸びる見通し。* リチウムイオン電池セパレータ

Q：機能繊維・商事は黒字化したが、今後、現状の取組みの延長線上でハードルレートを上回るところまで改善するのか？

A：国内の工場を 1 工場に集約するなど、固定費対策を進めてきている。今後は、収益率の低いビジネスを絞っていき、資産効率を上げていくことでハードルレートを上回ることができる見通し。

Q：当期純利益について、上期に対して下期に減益の見通しだが、要因は何か？

A：下期の営業利益は、上期並みを想定しているが、当期純利益の見通しは 65 億円（上期 57 億円、下期 8 億円）とした。下期は雑損益として、過年度実績等から災害関係費やクレーム等の費用を一定程度織り込んだ。法人税は、上期に一時的な税金費用の減少もあり法人税負担が少なくなったが、下期は通常の税負担になると想定している。

以上